

ワールドカップ 1988—国際会議の舞台裏—(2)

今野 浩 (中央大学)

3. スタンフォード 1970

1970年の夏、私はスタンフォード大学で2度目の夏を過ごしていた。

3月初めに行われた博士資格試験に合格した私は、学科図書室の半分近いスペースを占拠するダンツィク・コレクションから、手当たり次第に借り出した研究レポートを、読みまくっていた。ここには「数理計画法の父」をめがけて、世界中の研究者が研究レポートを送り届けてくるのである。

そんなある日の午後、学科の中で2番目に若いリチャード・コトル准教授から、手が空いていたらすぐ来てくれないか、という電話がかかってきた。

1934年生まれのコトル准教授は、ランド・コーポレーションからカリフォルニア大学パークレー校に移籍したダンツィク教授が育てた、“パークレー四天王”の1人で、「2次計画法」に関する研究で有名になった人である。

部屋の中には、あごひげを蓄えたコトル教授のほか、2人の人物が私を待っていた。1人は、数カ月前に学科主催のセミナーで講演を聞いたことがある、IBMワトソン研究所のフィリップ・ウォルフ博士である。講演は、“まだこんなことをやっているの?!”といった感じの内容だったが、学生たちはビッグなウォルフ博士の話、を、恭々しく聞いたものだ。

もう1人は、ショート・パンツ姿の“青年”，ミシェル・バリンスキー・ニューヨーク市立大学教授である。コトル教授より2つ年上で、ウォルフ博士より2つほど年下のこの人は、ダンツィク教授の年来の友人である、プリンストン大学のアルバート・タッカー教授の下で博士号を取ったあと、1965年に「マネジメント・サイエンス」誌に掲載され、ランチェスター賞に輝いた「整数計画法」に関する総合報告で、一躍スターダムに乗った秀才である。

数理計画法の揺籃期に研究の中心となったのは、プリンストン大学のタッカー・グループと、ランド・コ

ーポレーションのダンツィク・グループである。タッカー・グループが数学者の集まりであるのに対して、ダンツィク・グループは応用数学/OR研究者の集まりである。

日本であれば、分断されているはずの2つのグループが、一体化して研究に取り組んだのは、20世紀前半最大の数理科学者ジョン・フォン・ノイマンが、両者をつないだからである。

純粋数学者にとっても応用数学者にとっても、フォン・ノイマンは神様のような存在だった。1947年にダンツィク青年が単体法を引提げて、プリンストン高等研究所にこの人の下を訪れたときに紹介されたのが、タッカー教授である。2人の友情は、このとき以来1995年にタッカー教授が亡くなるまで、半世紀にわたって続いた。

さて、強大な「タッカー＝ダンツィク帝国」のまとめ役を務めたのが、私を待ち受けていた、ウォルフ＝バリンスキー＝コトルの若手三羽鳥である。話を切り出したのは、最年長のウォルフ博士である。

「われわれが中心になって、来年初めに『国際数理計画法学会』を設立することになったのだが、日本からも理事を選出したいと考えているので、誰にアプローチすればいいか、教えてもらえないだろうか」

誰か1人といえば、ファルカーソン教授に激賞された伊理正夫東京大学助教授だが、長幼の序を重んずるこの人が、上司に当たる森口教授を差し置いて、国際学会の理事を引き受ける可能性は薄い。

森口教授は、戦前の航空工学を出発点に、戦後は応用力学・統計学・OR・数値解析へと専門分野を広げ、そのすべてにおいて第一人者と称されたスーパー・エンジニアである。50年代初めに、線形計画法を日本に紹介したのは、数学者より数学に詳しく、エンジニアとしてもすべての資質を備えたこの人である。

またダンツィク教授が日本を訪れ、線形計画法に関する連続講義を行ったとき、通訳を務めた森口教授の博識に、ダンツィク教授が「私より線形計画法に詳し

い」と感嘆したという話が伝わっている。

60年代はじめ、森口教授はわが国における線形計画法の第一人者だった。しかしこの人の関心は、その後間もなくより新しい分野、すなわち計算機科学に移ってしまった。アメリカを追いかける日本のスーパー・エンジニアは、役に立つ成果が出るかどうか分からない“研究”より、必ず役に立つ新技術の導入に全精力を傾けた。このためこの人は、4つの分野の第一人者でありながら、あまり多くの論文を書くことはなかったのである。

後世の研究者の中には、この人を、“アメリカで生み出された新技術の輸入業者に過ぎない”と批判する人もいるが、時代はスーパー・エンジニアに、このような任務を要求したのである。

では森口・伊理両教授以外に推薦すべき人はいるか。私を知る範囲では、東大の竹内啓、慶大の関根智明と刀根薫、東北大の渡辺浩、九大の倉田令二郎、電力中研の小野勝章氏らは、数理計画法の専門家と呼ぶにふさわしい知識の持主だった。

これらの人が集まる「数理計画研究会」では、アメリカの専門誌に掲載された論文をたたき台に、カンカンガクガクの議論が闘わされていた。この中の誰かが、ここでの議論をベースに英文論文を書き、アメリカの一流ジャーナルに投稿していれば、日本の数理計画法は、より早い段階で国際的ステータスを確立していた可能性が高い。

ところがこの時代、海外のジャーナルに論文を掲載してもらうためには、今とは比べものにならない手間とコストがかかった。10ページの英文論文をタイプしてもらくと2~3万、レフェリーの要求に応じて修正する際にまた2~3万、その上数万の掲載料まで取られる。学卒初任給が4~5万円という時代に、10万円近くかかるとなれば気を削がれる。日本人研究者の論文が、海外のジャーナルに載るようになったのは、1970年代末以降のことである。

このようなことを考えれば、推薦すべきは伊理助教授だが、この人をその気にさせるには、森口教授の名も挙げておいた方がいい。“森口・伊理教授のどちらかをお願いしたい”という依頼状が届けば、2人の信頼関係と諸般の情勢から見て、森口教授が伊理助教授にこの仕事を任せるのではなかろうか。

そこで私は、森口・伊理教授の名前を挙げた。するとウォルフ博士は、

「伊理というのは、ネットワーク・フローの伊理か」

と尋ねた。そこで私がその通りだと答えると、ウォルフ博士は

「もう1人の森口という名前は聞いたことがないが、どのような人か」と問い返した。

「森口教授は、伊理助教授の上司にあたる人で、日本における線形計画法の第一人者と呼ばれています。ダンツィク教授が日本で連続講義をされたときには、通訳を務めていますから、ダンツィク教授にお聞きになれば、この人がどのくらい線形計画法に詳しいか、お分かりいただけるはずですよ」

「森口はどのような論文を書いているのか？」と、今度はバリンスキー教授。

「この分野で英文論文をお書きになってはいないと思いますが、日本では第一人者と呼ばれています」

「日本では、1つも論文を書いていない人を第一人者と呼ぶのか」と、鋭く迫るウォルフ博士。その顔には、侮蔑の表情が表われていた。アメリカでは、論文を書かない人は、“研究者”とは呼ばないのだ。

「誰か1人ということであれば、伊理助教授でしょうが……」と言いかけたところで、ウォルフ博士は「分かった。もう結構」と、私の言葉を遮った。

人の話を聞きもせず何だと、気色ばんだ私を見てコトル教授が、「また何かあったら連絡するので、今日のところはこれで」と、とりなした。ウォルフ博士は何も言わず、パイプに火を点けた。

結局話はおしまいになった。そして71年にスタートした学会役員の中に、日本人が含まれることはなかったのである。三羽ガラスは、伊理教授にコンタクトして断られたのだろうか。それともレベルの低い日本ごときは、外したほうがいいと考えたのだろうか。

3年を過ごしたスタンフォードでの、この不愉快な出来事を思い出した私は、ウォルフ博士の言葉を信じた自分のバカさ加減に、臍を噛んだのである。

4. 「ジュウ社会」アメリカ 1971

アメリカは「ジュウ社会」だと言ったら、多くの人は「銃社会」という文字を思い浮かべるだろう。そのとおり、アメリカは紛れもない「銃社会」である。

サンフランシスコの夜間1人歩きがいけないのは、ずばり生命の危険に晒されるからである。拳銃を撃ちまくる、「ダーティー・ハリー」の舞台となったのはサンフランシスコだが、風光明媚なこの観光地には、夜になると狂暴な人が大発生する。

スタンフォード大学の北40マイルに位置する、人

口60万(当時)のサンフランシスコでは、毎年300人が銃で撃たれて死んでいるということだが、1,000万人が住む東京に換算すれば、年に5,000人という凄まじい数字である。

“真昼でも歩道は車道側を歩け、必ずポケットに10ドル紙幣を入れておけ”と言われるのは、建物側を歩いていると、ビルとビルの際間に引きずりこまれ、金品を奪われることがあるからだ。10ドル紙幣を1枚渡せば、命までは取られないが、抵抗するとズドンである。

サンフランシスコに限らず、アメリカの大都市はどこも危険一杯である。80年代半ばにフィラデルフィアで開催された学会に出席したとき、滞在していたホテルのロビーで、白昼2人のビジネスマンが白人青年に射殺され、フロアが血に染まる場面に居合わせたのが、逃げようと思っても、足がすくんで一歩も動けなかった。

一方、スタンフォード大学の周辺は、比較的治安がいいと言われていたが、それでもどの家庭も1つや2つの銃を持っていた。最初の1年間、われわれ家族は、高級住宅地メンロー・パークの一戸建て住宅に住んでいたが、真暗闇のような顔をした清掃夫がやってくるたびに、不安な気持ちにさせられたものだ。

外国人でも拳銃を買うことはできたがそうしなかったのは、ホールドアップに会うリスクと、間違っただけで暴発させるリスクを勘案した結果である。

清掃夫が住んでいるのは、大学に隣接するパロアルトの東側に広がる、イースト・パロアルトの黒人街で、そこではサンフランシスコ並みの殺人事件が起こっていた。一方、キャンパス内の学生寮で暮らしている限り、このようなリスクから解放される。なぜなら、アメリカの大学にはキャンパス・ポリスがあって、悪い奴が入ってきたらたちまち捕まえてくれるからである。

「銃社会」はこのあたりでおしまいにして、もう1つの「ジュウ社会」について書くことにしよう。

2つ目のジュウとは「Jew」、すなわちユダヤ人のことである。ウィキペディアによれば、世界全体で約1,400万人といわれるユダヤ人のうち、530万人がイスラエルに、そして530万人がアメリカに住んでいる。次に多いのはフランスだが、アメリカに比べると1けた少ない。

アメリカにこれだけ多くのユダヤ人が住んでいるのは、ナチスに席捲されたヨーロッパから逃れてきた人が多いからである。第2次世界大戦後のアメリカが、科学技術・文化・芸術面でヨーロッパを追い落としたのは、優秀なユダヤ人のおかげである。

アメリカで権力を握っているのはWASP、すなわち白人・アングロサクソン・キリスト教新教グループである。したがってユダヤ人はいくら優秀でも、大統領にはなれないといわれているが、その一方で彼らは、金融・文化・芸術・ジャーナリズムを支配している。

また一般の人には知られていないが、大学においてもユダヤ人勢力は、強大な力を持っている。中でもスタンフォードは、突出した「Jew社会」である。一説によると、教授の6割がユダヤ人だということだが、ユダヤ人がアメリカ総人口の2%を占めるにすぎないことを考えれば、これは驚くべき数字である。

私が所属したOR学科には、9人の専任教授がいたが、学科主任のジェラルド・リーバーマン教授(この人は鳩山元総理の指導教官である)以下、すべての教授がユダヤ人だった。お隣の統計学科の教授も、ほとんどユダヤ人だった。恐らく数学や物理もそうだったのではないだろうか。

「優秀な人を集めたらたまたまユダヤ人だった、というのは嘘で、半分は情実だ」と言うのは、ユダヤ人と対抗して力を伸ばしている、ギリシャ人のパノス・パルダロス教授である。

この人はかねて、日本人とギリシャ人が手を結んで、ユダヤ人勢力に対抗しようと言っているが、京都大学のH名誉教授は、ギリシャ人は“辻さん”、すなわち“シンニウ付きのジュウ”だから気をつけたほうが良い、とアドバイスして下さった。

それはさておき、ORをはじめとする数理科学のパイオニアの多くは、ユダヤ人である。ジョン・フォン・ノイマンを筆頭に、1920年までに生まれた第1世代の人たち、例えばジョージ・ダンツィク、アブラハム・チャーンズ、ハーバート・サイモン、リチャード・ベルマンなどは、数理科学の新分野を切り拓いたユダヤ人である。

中でもフォン・ノイマンは、数学・物理学・経済学・ゲーム理論・数値解析・OR・計算機科学・気象学などの新分野を開拓し、各々の分野における基本的な問題を解決してしまった超人である。

晩年には、ナチスに先んじて原子爆弾を完成させる上で、指導的な役割を果たしたことから、反体制派の知識人に嫌われているが、数理科学者はこの人に“尋常ならざる”尊敬の念を抱いている。1957年に53歳の若さでこの世を去ったとき、多くの科学者は、せめてもう10年長生きしてほしいかと思ったはずだ。

私は早く亡くなった、フォン・ノイマンを除く第1

世代のユダヤ数理科学者の多くを、この眼で見る機会があったが、どの人も強烈なオーラを発散していた。

第1世代の人たちは、既存分野のエスタブリッシュメントと戦って、アイデンティティーを確立した人である。新分野といっても、どこかで伝統的分野とのつながりを持っている。そして新分野は、伝統的分野から転身した人たちの力で成長するのである。数理計画法の場合も同じである。

この新分野が立ち上がったとき、新たに参入したのは(応用)数学者、経済学者、そして電気工学をはじめとするエンジニアである。優秀な人が新分野に転出すれば、伝統的な分野との間に波風が立つ。

その分野が急成長して、世間の注目を浴びるようになると、軋轢は更に大きくなる。場合によっては、妨害や中傷を浴びるかもしれない。強靱な精神力がなければ、その圧力をはねのけて、新分野を確立することはできない。

私も80年代半ばに、「金融工学」という新分野の立ち上げにかかわったことがあるが、自らアイデンティティーを確立するために、伝統的分野の研究者(経済学者やエンジニア)と戦わなくてはならなかった。

一方第2世代は、第1世代が敷いたレールの上を走ればいい。研究費の獲得についても、第1世代より格段に楽である。それに第1世代が獲得した名声までもが、労せず転がり込んでくる。

数理計画法の第2世代を、1921年から40年までに生まれた人と定義すれば、これらの人の中には、第1世代の薫陶を受けた、エゴン・バラス、ラルフ・ゴモリー、ロイド・シャプレー、レイ・ファルカーソンのような、人格識見ともに優れた研究者がいる一方で、優秀ではあっても、謙虚さを欠く人が出てくる。

モンリオールで、私に様々な要求を突き付けた第2世代のユダヤ人の中には、アロガントな人が何人もいた。その中で突出していたのが、コーネル大学のジョージ・ネムハウザー教授である。

私より5つほど年上のこの人は、1966年に出した「動的計画法」に関する教科書で、日本でもよく知られているスター教授であるが、このくらい“がらが悪い”大学教授は珍しい。

1971年にコーネル大学を訪れた折に、ファルカーソン教授からこの人を紹介されたことがあるが、ショートパンツ・アロハシャツ・サングラス・サンダル姿を見て、私は盛り場にたむろするアンチャンを思い出した。

ORの世界は、理論研究者と応用研究者に二分され

ているが、最右翼の応用研究者であるこの人は、かねて左翼理論研究者を、“数学理論で遊んでいる役立たず”と批判していた。

私もこの意見には半分同意する。ORは世の中の問題を解決することが本務である以上、どう見ても役に立ちそうもない数学理論は、研究の名に値しない。

しかし、一見役に立ちそうもないと思われた数学理論が、後年大ブレイクして役に立つ結果を生み出すこともあるから、役に立たないと断定するには、相当な自信と覚悟が必要である。ネムハウザー教授は、この意味でも極めて過激だった。

モンリオール・シンポジウムの晩餐会で、子分を引き連れたこの人に声をかけられたとき、私はマフィアの親分を演じるジョージ・ラフトを思い出した。この自信たっぷりな態度は、実績に裏付けされたものであるだけに厄介だ。

この人は、88年のシンポジウムに日本が立候補していることを知って、晩餐会の席で声をかけてきたのである。悪い人に捕まったと思ったが、逃げるわけにもいかず、1時間ほど言葉を交わすことになった。

酔いが回った勢いでネムハウザー教授は、“役に立たないOR”批判を始めた。

「ORは役に立たない、という批判が絶えないのは、数学をひねくりまわして遊んでいる奴が多いからだ。特にスタンフォードとカーネギー・メロンは、悪しきOR研究者の巣窟だ。エゴン・バラスの研究は、その最たるものだ。あのようなことばかりやっているから、大学を追い出されるようなことなるのだ」

その言葉は余りにも苛烈だった。バラス・グループの深遠な数学理論に魅せられて、6年にわたって後追いを続けたにもかかわらず、何一つ結果を出せなかった私は、仮に結果を出したところで何の意味もない、と断定されたのである。

ネムハウザーのバラス批判は、私にこの分野からの撤退を決意させることになるのであるが、このときの会話は“二度とこの人と口を利きたくない”，という気持ちを植え付けた。

ところがこの9年後、私は東京で丸半日にわたって、このアロガントな第2世代ユダヤ人と、1対1で付き合うことになるのである。ついでに書き加えれば、モンリオールから16年後の1995年、バラス教授の研究は、実用的問題を解くために決定的な役割を果たしたことを理由に、フォン・ノイマン賞を受賞している。ネムハウザー教授の予想は、見事に外れたというわけだ。